

虫の夜の

松岡隆子

篠笛の音水平に秋に入る
清潔な木洩れ日踏んで今朝の秋
八月の昼顔あはき水辺かな
いまさらに遠きふる里踊唄
稲の花夢の中にも匂ひくる
いつの間にも空き地にゑのこ草
ひめむかしよもぎ空き地の荒るるまま

一木の影に躓き秋暑し
何するとなく草臥れて扇置く
かなかなの声を遠くに人病めり
黙禱の刹那を鳴いて秋の蟬
虫の夜のけふが明日になる時間

八月半ばというのに猛暑の勢いはなかなか収まりそうもない。その所為かどうかわが家の小さな庭にも少なからず異変が起きている。昨年までは庭の至るところに咲いていた露草が今年は庭隅にいくらかあるくらいで、それもまだ花芽もついでいない。一方、いったん咲き終わった凌霄の花が八月に入ってからまた咲きだし、十五、六もある花は散ることもなく今も咲き続けている。凌霄は盛夏に咲いてこそで、季節外れの朱さには目を逸らしたくなる。

秋は露草、あの澄んだ瑠璃色の花を見ないと私の秋は始まらない。